

第8回「オリアム随筆賞」

【佳作】

母のセーター

今道洋子・福岡県

死んだ母は編み物が得意だった。長崎県の田舎の小さな病院で看護婦長を務め、女手ひとつで私を育て、たくさんの編み物の品を残してくれた。どれもが大切な思い出の品だが、一番の思い出の品は、新米教師時代の私に編んでくれた棒針編みのセーターだ。

三十七年前、私は福岡市の中学校に国語科教師として採用された。故郷を離れ、2DKのアパートで一人暮らしをする、若くて未熟な私には辛いことがたくさんあった。教材研究に何時間かけても十分な授業をすることが出来なかった。不慣れな部活動の顧問をし、思春期を迎えている生徒たちの指導に追われ、慢性的な睡眠不足で食生活もいい加減だった。その頃の私は風邪を引いてこじらせ、学校を休む日が多々あり、二年目の秋には熱が引かず、一週間続けて休んだ。同僚の先生方は心配し、学年主任の先生が買ってくださいましたお寿司をもつて、同学年の女性の先生方がお見舞いに来てくださった。

そんなことがあって一週間ほどたった頃であったか、アパートに小包が届いた。母からだった。迷惑をおかけした職場の方に食べていただくようにと、長崎県の銘菓が三箱。そしてセーターが一枚入っていた。母の手編みの、ピンクのモヘアのセーター。シンプルなメリヤス編みのセーターは、ふんわり優しく暖かく、微妙な色合いが二十四歳の私に似合った。学校に着ていったそのセーターを、先生方はとても褒めてくださった。

九州とはいえ、玄界灘に面した福岡の冬は寒い。学校に暖房設備はなかった。それから母は手編みのセーターやカーディガンを何枚も送ってくれた。アラン模様や種々の模様が編み込まれた、非常に凝っているフィッシュヤーマンズセーター。何色もの毛糸を編み込んで模様を浮かび上がらせたフェアアイルセーター。ダイヤ柄模様のVネックのアーガイルカーディガン。タータンチェックの巻きスカートにこれらのセーターやカーディガンを組み合わせるのが、当時の私のお気に入りのコーディネートだった。

そんな頃、学校生協のカatalogに編み物道具入れのバッグが掲載された。ピンクの花柄のキルティング生地で作られた、六十センチメートルほどの円筒形のバッグだった。一部がビニール張りで中を見ることが出来る。ポケットが中にも外にもあり、とても使いやすそうに思えた。母へのプレゼントだと言って購入した私に、先輩の先生が「エビタイ運動やね。」とおっしゃった。これをプレゼントするからさらにたくさん素敵なニットを編んでね。確かにそうかもと私は笑った。

長崎県に戻って母と一緒に暮らしたいという思いはあった。しかし私は長崎の採用試験に落ち続けた。三十歳を前に、いずれは母を呼んで一緒に住もうと福岡に3LDKのマン

ションを購入した。その家のインテリアにと母は、レース編みのピアノカバーやベッドカバー、テーブルクロスを送ってくれた。そんな日々が二年ほど続き、やがて母の編み物の品が送ってこなくなった。

教師になって九年を終えた春休み、正月以来三ヶ月ぶりに長崎に帰った私は驚いた。母の顔色が悪く、食欲が全くなかったからだ。気になりながらも、何も言わずに福岡に戻った。その年の夏休みを前に、従妹からすぐに帰ってくるように言われた。臍臓ガンだった。十時間以上に及ぶ大手術を経て一度は回復したように思われた母だったが、二年に満たない闘病生活の末、六十六歳で逝ってしまった。

三十代半ばから責任ある仕事に就くようになった私の仕事着はスーツになった。母が編んでくれたニット類は、母が暮らすことがなかった私の家の、母が長崎で愛用していた三段引き出しに収められたままになっていた。だが昨年十一月、網膜剥離を患った私は、二週間の入院生活の後、ひと月の自宅療養生活を余儀なくされた。そのとき、家で毎日着ていたのが、母が編んでくれたニット類だった。二十五年の歳月を経ても、私のためのニットは、どれも体に程よくフィットした。軽く、暖かく、そして優しかった。

母の三段引き出しには母の編んだニット十二枚と共に、あの花柄の布バッグがある。バッグの中には、十組を超える木製の棒針セットや、円形に曲がるプラスチックの棒針セットが収められている。ゲージを取って計算した編み図が母の手で書かれたノートも二冊入っている。ピンクを主体としたグレーやグリーンが交じった多色使いの美しい色合いのモヘヤの毛糸玉も残されているが、それを完成させる人はもういない。

目を患った私は、この春、学校を辞めた。根気のある細かい作業はもう出来ない。だが、この花柄のバッグは決して手放さないだろう。そして、母が編んでくれたニットの数々を、この冬も、これからも、大切に着ていこうと思う。